
誓いの言葉、彼女の口付け

きよこ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

誓いの言葉、彼女の口付け

【コード】

N1454C

【作者名】

きよこ

【あらすじ】

大好きな人が今日結婚する。彼は結婚式の最中、叫ぶ。「嫌だ！」と。

それは映画のワンシーン。

古い映画だった。タイトルもよく知らない。彼の父と母は仲良く肩を並べて、遠い記憶を辿るように、その映画に見入っていた。

真っ白なドレス。古びた教会。誓いの言葉。開け放たれる扉。かつて愛した人。差し出す手。ふわりと風をまとったドレス。走り出す二人。愛を信じて、手に手を取った。

彼の記憶には、それが鮮明な光となって残り。
彼はこの日を迎える。

生成りのレースが混じった白いドレスを纏った瑞穂^{みずほ}は、今日最愛の人と式をあげる。

「純白よりも少し生成りのドレスがいい」とこねた彼女がようやく見つけたドレスは、他ではあまり見ない、どこか古いヨーロッパを思い起こさせるものだった。純白のレースと生成りのレースが幾重にも重なり合い、散りばめられたパールが、陽光に当たって白く輝く。

今日の良き日を迎えるにあたり、最高のドレスだと、彼女は世界中の誰よりも幸せそうな微笑を浮かべる。

夫となる彰義^{あきよし}と足繁く探して決めた結婚式場は、格式高いヨーロッパの教会を思わせる荘厳な教会を有する式場だった。重厚な木造の建物は、築三年らしいのだが、築百年くらいに見えるように、わざと古びた様式にしてある。

赤や青、オレンジの光を透かす、イエス・キリストのステンドグラス。ツタが絡まったデザインのブロンズの十字架が、厳かな雰囲気気を漂わせる。

父、英介の腕を取り、瑞穂は教会の扉の前に立つ。この扉の向こうには、瑞穂を祝福するたくさんのお親族や友人が待っているのだ。

「あなたは、瑞穂さんを生涯の妻と定め、健やかなる時も病める時も彼女を愛し、彼女を助け、生涯変わらず彼女を愛し続けることを誓いますか？」

彰義は少しだけ声を震わせながら、決意に満ちたまっすぐな瞳ではっきりと口を動かし、「誓います」と誓いを立てた。

司祭の青い瞳が、彰義から瑞穂へと視線を移す。

瑞穂は、小さく唾を飲み込んだ。待ち望んだ幸せを誓う日。夢のように、現実ではない気がして、そっと目を閉じた。

「あなたは、彰義さんを生涯の夫と定め、健やかなる時も病める時も彼を愛し、彼を助け、生涯変わらず彼を愛し続けることを誓いますか？」

閉じた目をゆっくりと開ける。飾られた白いバラと、手に持った百合のブーケが目に見え込んできた。司祭の白い髭に、栗色の毛が混じっているのが見えて、瑞穂は笑いそうになった。そのおかげで、緊張が解けた。瑞穂はふっと小さな息を吐き、夢見てきたセリフを口に出す。

「……誓います」

ふと横を見ると、たれ目の瞳を細くして優しそうに微笑む彰義の顔があつた。瑞穂は、涙が出そうになるのを必死にこらえて、彼に笑顔を送る。

彼は彼女のことを好きだった。この日を迎えることを知った日、彼は隠れてこっそりと涙を流した。彼女のことを心から好きで、結婚するのは自分だと信じていた。

いつ。いつの間に。彼女は自分以外の人と愛し合つたのだろう。彼女はいつも、自分の前で最上級の笑顔を見せてくれたし、「好き」といつも言ってくれていた。

他の誰よりも、彼女を知っていると思つていた。彼女が自分以外の誰かを想つていたなんて、信じられなかった。

初めて参列する結婚式が、彼女のものだなんて。彼には、この現実を受け入れることが出来なかった。

「この結婚に異議のある者は今のうちに申し立ててください！」
司祭が両手を広げ、参列者達に呼びかける。

異議を唱える者など、いるわけがない。静まり返つた教会の中で、彼は言葉を発するのは今しかない、本能で悟つた。花嫁を奪い去る、あの映画のワンシーンが脳裏をかすめていった。

彼はまっすぐに手をあげた。ゆらりゆらりとランプが灯つた天井

めがけて、彼の手は伸びていた。

「嫌だ」

彼は小さな声でそう言っていた。参列者達がざわつくのがわかって、彼は顔が真っ赤になっていくのを感じた。

恥じらいを捨てるために、彼はもう一度、大きな声で「嫌だ！」と叫ぶ。彼の隣にいた初老の女性が、彼の肩をそっと掴んだ。

「リヨウ君」

たしなめる響きを持った声が、彼の名を呼ぶ。彼はその手を振り払い、じっと、花嫁　瑞穂をにらみつける。

「リヨウ君……」

輪郭を覆うように曲線を描くマリアベールの奥で、彼女が哀しそうな顔で彼を見ていた。

彼はぎゅっと目をつぶり、泣き出しそうな声でつぶやいた。今、言わなくては。彼女は遠い、遠いところに行ってしまうのだ。

「瑞穂が好き。俺のほづがそいつより瑞穂のこと、好き」

ヴァージンロードを戻って、彼の立つ場所まで彼女はやって来る。彼女が手に持った百合のブーケの清廉とした香りが、彼の鼻先をくすぐった。

「ありがとう、リヨウ君。リヨウ君の気持ち、忘れない」

「行かないで」

情けない、そう思いながらも、声が震えてしまうことを我慢できなかった。彼女は彼の前にひざまずき、彼と視線を合わせた。生成りのレースと純白のレースが、ふわりと風を揺らした。

「ごめんね、リヨウ君。お姉ちゃん、リヨウ君のことも大好きだけ

ど、どうしてもそばにいたい人がいるの」

「行かないで」

わがままなのはわかっていた。けれど、彼女を手放したくなくて、彼は大粒の涙を零しながら、精一杯の気持ちをつづらせた。

彼女の手が、彼の頬に触れる。白い手袋越しに、彼女の温もりを感じた。泣き虫の自分が涙を流す時、彼女はいつもこうやって頬に触れてくれた。

「リョウ君、ありがとう。私、幸せになるから。リョウ君も、お姉ちゃん以上に大好きな人と、ここでいつか愛を誓ってね」

柔らかい感触が、彼の額に注がれる。ぼつてりとした彼女の唇は、彼の額に誓いのキスを落とすとした。

額がじんじんと熱かった。彼女の温もりを忘れたくなくて、彼は額を両手でそつと押さえた。

「ごめんね、瑞穂ちゃん」

「いいえ。大丈夫です、お義姉さん。嬉しかったから」

彼の母が、彼女に詫びる。母は相当怒っているのだろう。こんな場所で怒りを露にできないと、今にも生えてきそうな角を必死に押さえているのが、彼にはわかった。

「でも、せつかくの式をぶち壊したわ。この子ったら」

母の手が、彼のふわんふわんの髪の毛をかきむしる。優しくなでているようでいて、力のこもったその撫で回し方に、彼は口をへんの字に曲げた。

「まだ五歳ですから。みんな、微笑ましく思っただけですよ。気にしないで」

見回すと、くすくすと笑う、参列者達の姿があった。彼はうつむいて、唇をかんだ。悲しくて、くやしかった。

彼女のドレスが揺れる。純白と生成りの向こう側に、燦然と輝く彼女の笑顔がある。

大好きだった。誰よりも。

誓った言葉も忘れない。

「瑞穂、いつか俺が結婚してあげるよ！」

叶わなかったけど。忘れない。

「彰義と瑞穂は、神と公衆の前で夫婦となる約束をしました。ゆえに私は父と子と聖霊のみ名において、この兄弟と姉妹とが夫婦であることを宣言いたします。神があわせられたものを人は離してはならない。アーメン」

司祭の低音の声が教会に響き渡る。

司祭に続いて、参列者達が「アーメン」と言うので、彼にはなぜその言葉を言うのかわからなかったけれど、彼もその言葉を大きな声で口にした。

「アーメン」

誓いの言葉、彼女の口付け

「バカ」

母の強烈なゲンコツが彼の頭を襲ったのだった。

(後書き)

つい最近、結婚式に出席しました。出会いもゴールも、そしてスタートも、すべて見た友人の結婚式を祝いつつ、こんなお話を妄想してました。

ほのぼのしていただけると、嬉しいです。

ご意見、ご感想お待ちしております。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1454c/>

誓いの言葉、彼女の口付け

2009年3月24日09時20分発行